

木蓮の木の下の

澤田 悟

野生の動物は夜行性が多いという。外敵から身を守るために長い年月をかけ昼と夜を逆転させた生活に変えてきた。生存率をあげるための選択だった。私もいつのまにか夜行性の生活に、何時に起きるとも寝るともつかない不規則な生活に慣れてしまっていた。それは本当に必要な変化だったのだろうか。

午前三時、眠れない私は何本目なのか忘れてしまった缶ビールのプルトップを開けながら、そんなことをぼんやりと考えていた。深夜放送のテレビ画面をときおり眺める間に時間が過ぎていく。横目で「しどけない」という形容がふさわしい寝姿をさらしているナチを見る。ナチは本能が築いた生物の歴史、夜行性を放棄して人の生活に寄り添ってくれる数少ない生き物の代表だ。彼はいま何も思っていないのだろうか。

ナチはいっしか自分の寢床と決めて占

有している丸いクッション（近所の衣料店で見つけて娘が大きくなったら、そのうでで飛び跳ねて遊べるだろうと勝手に決めつけて、先物買いのそのまた先物買いのように衝動買いたものだ。娘ときたらまだ寝返りもうてない赤ん坊だったというのに）の上でまるくなり、そのうち姿勢が崩れてきて前足を外に投げ出し、後ろ足がのび、ついには仰向けになり、背中にくらべてまばらにしか毛が生えていない、その分無防備な印象を与えるお腹をみせ口をあけ舌を少しはみ出して寝ている。まるでスヌーピーだと思う。さすがに犬小屋の屋根で寝たりはしないけれど。

リビングの一角、こまごまとした品が雑多に押し込まれた棚の前におかれたそのクッションがナチのいちばんおちつけ場所だ。

「犬はね、どこかに自分の居場所が要る

の。たとえばわざとじゃなくても失敗してしまつて飼い主に叱られたときとか、ごめんなさいと言つてもまだ飼い主は赤鬼のように怒つていて（妻は私をみて笑つた。私としてはそのようにナチを怒つた覚えはなかつたし、夫を赤鬼にたとえるユーモアのセンスはどうかと思つのだが）いたたまれなくて逃げ込む場所があるのよ。その場所にナチが逃げ込んだら、とりあえず一時休戦ね。覚えておいて。

それでも追いかけて叱つたらナチが逃げ込む場所がなくなつてしまう。それはとてもつらいストレスがたまる事なの。あなたが会社でミスをして叱責されて、謝つてそれでもいつまでもいつまでもグチグチ言われ続けて、喫煙所とか帰りに立ち寄つて愚痴を言い合う居酒屋にまでそんな上司が追いかけて来たらつらいでしょう？ ナチをそんな気持ちにさせないでね”

妻の幻が私の目の前で語りかける。手を伸ばしたら届くような近さで。娘の寝息さえ聞こえてきそう。私はナチから目をそらし今では苦いだけのビールを飲み干し、もう一缶取りにキッチンへむかっ

た。冷蔵庫を開けると白い霧のような冷気がゆつくりとただよい床近くへ降りていく。私の気分とおなじく、それはけして高みには飛翔せず床の上をゆらゆらと漂い続ける。

冷蔵庫に食品はまばらで、おそらくみな賞味期限が切れてしまっている。目につくのは缶ビールだけだ。手がしびれるような冷たさをてのひらに感じながらリビングの椅子に戻りブルトップを引き上げる。その音が届いたのか、寝ぼけ顔でナチが目を開けた。薄目を開けて私を見上げまた目を閉じる。尻尾がだらしなく落ちて床を這う。

遠くからバイクの音が聞こえてくる。朝刊を届ける新聞屋だろう。毎朝数分と違わない時間にやってきて玄関先に止まり投函していく、そんな時刻だ。春にはまだ早い季節。外は深い闇に閉ざされている。闇の中をか細いライトの光で走る小さなバイクの姿を思い浮かべる。

昨日、私は新聞を読んだだろうか、一昨日はどうだ。朝刊は新聞受けにあふれ道路にまで散乱しているかもしれない。不安にかられてすぐにでも確かめに行き

たくなるが、そんな思いをあざ笑うように新聞屋のバイクは我が家の前に至り、ごそごそと朝刊を押し込む気配が伝わってくる。そのうち私がまだ生きているのかどうか、確かめにチャイムを鳴らす輩が現れるだろう。それは新聞屋からの通報でやってきた警察官かも知れない。

半分ほど飲み干した缶を空き缶がいくつも並んでいるテーブルに置き私は立ち上がる。門燈のスイッチを押すと玄関のガラス越しに灯りが闇を少しだけ追い払うのが見えた。私はそうつと、おびえたナマケモノのように顔を突き出し門柱のあたりに散らばっているだろう朝刊を見つめる。

足元に何か柔らかいふさふさした感触がする。ナチだ。ドアをあける気配に起きたらしい。大あくびをしながら私を見上げていく。散歩に行くのかと言わんばかりの期待感が感じられる。そのままずりりとドアの隙間をすり抜けて明け方前の闇の中に消えていった。きつとトイレだ。迷い込んでくる飼猫などに吠え付かなければいいが。そんなことを思いながら、案の定数日分たまっていった朝刊の

束を掘り起こすようにしてもどった。

数分して、ナチが戻ってきてドアをガリガリとひつかく。私を見てもう一度大きなあくびをもらし闇の中を徘徊してきた気配を濃厚に漂わせながらクツションに戻りくるくと数度まわり丸くなった。けれど目はこちらをしつかりととらえていて、もし散歩に行きそうなら起き上がり前足を突き出してググツと伸びまでしてみせそうだ。それを知らながら私は飲みかけのビール缶に手を伸ばす。まだ夜は明けない。私の心の深い闇も明けそうにない。

*

わたしはずつと逃げてきた。そんな気がしてならない。

手元の子供の頃からずつとなじんできた、父の胡弓の黒光りする手触りを確かめて何とか心の動揺を抑えようとする。この胡弓はわたしのものだ、いくら自分こそう言い聞かせてみても罪悪感は消えない。父の葬儀の後、無断で持ち出してきたからだろうか。

小さな頃、父はわたしを抱いてよくこの胡弓を弾いてくれた。きつとその瞬間からわたしの人生は決まったのだ。このどこか寂しげなたたずまいの楽器と一緒に生きていこうとに決めたのだ。父がその後に何を考えようと、どんな人がわたしの前に現れようとそれは変わらない運命なのだ、思ってきた。

父が愛し慈しんだ、わたしが小さな頃から聞きなじんできたこの胡弓だけは誰にもわたしたくなかった。たとえ哲彦さんにも。だからわたしは父の葬儀の支度で開け放ちになり無防備な生家の一室から父の愛用の胡弓を無断で持ち出した。それがどんな意味を持つのか充分にわかりながら。それ以来生家に戻ったことも、連絡を入れたこともない。哲彦さんの電話番号はスマホから削除し、かかってくる誰からの電話にも出ないようにした。

あの頃、わたしはなにを考えていたのか。今になってはわからない。やるせない熱情に犯されてやったことだとしても、哲彦さんはおろか亡くなった父も許しはしないだろう。

思い起こせばわたしはいつも何かから

逃げてきたのかもしれない。父が望んだわたしの役割も「花嫁」という立場も捨てて逃げた。

それ以来、わたしの心は安まることがない。今は会社の寮暮らしだから胡弓のケースは普段は衣装ケースの裏に隠すようにしてしまっている。寮での慰めはヘッドフォンで音楽を聴くこと。学生のようにヘッドフォンをかけたままで職場に行つてしまい、声をかけられても気付かず、呆れられ疎まれたり噂になったりしているらしい。自分でも周囲から浮いているのはわかっていた。

面接の時も担当者のでっぺんが薄くなりかけた頭に汗をかきながら（頭から湯気がでるといふ漫画のような状況をはじめて見た）中年の太ったおじさんがわたしの履歴書を見て困つたような顔をした。「大学卒。音大ですか？」

「そうですけれど、今はかえって潰しが利かないんです」

わたしの苦し紛れの返答に納得がいかない顔つきで担当者履歴書をじっと睨んでいた。わたしは早くこの時間が過ぎてくれと願った。あれから半年が過ぎた。

実家から連絡はない。連絡が取れないようにしているのだから当たり前だが、いつか居所を知られるのではないかといても不安だ。真夜中に寝汗をビッシリとかいて飛び起きることがある。なにも悪いことはしていないのに、と自分に言い聞かせる。だけど本当に？ と心のどこかで聞き返しているわたしがいる。

*

私はナチと一日二回、朝夕散歩に出かける。それ例外では日用品、食料の買い出し。外出はほぼそれだけだ。ナチは散歩が好きだ。

妻は「なかには散歩が嫌いな犬もいるって聞くけど信じられないよね」よくそう言つてナチの頭を撫でていた。そばにいるナチの頭に伸ばされる妻の手を、そのやさしげな手つきをはつきりと思いだす。行き先は近くの公園とほぼ決まっていた。ナチが家に来て、妊娠中の妻とともに始めての散歩にいったのもその公園だった。

郊外にあるため人が少ないのも犬の散

歩初心者には助かった。公園にはたくさん
の木々や草花が植えられており、季節
の移り変わりに様々な花が咲くのを楽し
める。私はそれまで草木にほとんど興味
を持たない人間だった。花の名前も知ら
ない。知っているのは桜とチューリップ
くらいのものであった。そんな私にあき
れて妻は

「これがハナミズキ。白い花が多いけれ
どピンクがかつたのもきれいよ」とか丈
の高い木を見上げて「これは辛夷、こっ
ちは木蓮。どちらも同じような季節に白
い花を咲かせるの。私は木蓮の方が好き
かな」

そんなふうに教えてくれた。私はその
時、木蓮の白い花を見てみたいと思つた。
妻が好きだと言つたからだろうか？

会社に行けなくなつてどのくらいいた
だろう？ 妻と娘が亡くなつたのは秋だつ
た。ようやく涼しくなつて過ごしやすさ
を感じかけたころだった。それから何カ
月もの時間が過ぎた。実感としては止ま
ってしまったままのように感じられるのだ
が、私の外で時は変わらずに過ぎていく。
ごわごわした手触りでいつの間にか無精

ひげが伸びているのに気づくように、私
の外側で時が過ぎていくのを感じ、でき
るだけ無視しようとしてきた。そんな私
を外の世界に引っぱり出してきてくれている
のが（そんなことは決して考えていない
のだから結果として）ナチだった。

ナチは今年三歳になる、クリーム色の
毛並みが美しいオスのラブラドル・レ
トリバーだ。もともとは盲導犬になる
ための訓練を受けていた。私は知らなかつ
たが、訓練を受けたすべての犬が盲導犬
になれるわけではないのだそう。むしろ
多くの確率で何らかの理由で（落ち着
きがなかつたり、好奇心が強すぎたりし
て）盲導犬になれずじまいになる犬も多
いらしい。それらの犬たちはもちろん処
分されるわけではなく（そんな残酷なこ
とを、犬を愛する人たちが運営してい
る団体がするわけがないでしょうと、私に
むかつて妻は涙を流して抗議した）希望
者に譲渡される。いくらかの寄付金を収
めて専門家が訓練をした犬を譲ってもら
えるというわけだ。

ナチもその一頭だった。生来生き物が
なかでもとりわけ犬が大好きだった妻が

ネットで情報を調べ申し込んで、長い期
間待つてようやく順番がまわつてきて分
けてもらえた大切な一頭だった。

ナチは音に敏感な犬だった。その他の
条件については克服できても大きな音や
興味をそそる音に対してどうしても過敏
に反応してしまう。そのせいでナチは訓
練の次のステップに進めなかつた。そし
て我が家の一員になつた。ナチが我が家
に来るのと妻の妊娠がわかつたすぐあと
だった。私はナチに面会に行く時、必要
以上に気を使ってゆつくりと車を走らせ
「かえつて怖いよ」と妻に言われたこと
を覚えている。ナチは誰よりも早く妻に
気づいてそばに駆け寄つてきた。尻尾を
ふつて、それきり妻のそばを離れようと
しなかつた。訓練所の人があきれるほど。
妻はナチを「ナツチ」と愛おしそうに呼
んだ。

*

わたしは八尾という富山県の山間の静
かな町で生まれ育つた。

八尾には「風の盆」という盆踊りがあ

る。九月一日から三日間、日が沈む頃人々は静かにけれど興奮を心に秘めて歌い踊る。

独特と言ったのはおよそどんな踊りよりも静かで心の底に染みていくような慎重深い踊りであり謡いであるからだ。踊り手は菅笠を深くかぶって顔を隠し身振り手振りだけでその思いの丈を表す。それを息の長い甲高さが特徴の唱と三味線そして胡弓が支える。

陽気な阿波踊りなどとは異なる慎重深い、見るもの、聞くものの心の奥深くにいつしか染みてくる哀調を帯びた、ほかには見られないものだ。わたしは思う。音楽を教える学校に通つても「風の盆」に込められた深い響きに替わるものは得られなかった。八尾の人たちは生活の中に風の盆を、自然の営みを受け入れるように感謝を込めて謡い踊るのだ。

わたしも古い家の一人娘として菅笠をかぶって父の弾く胡弓の音色にあわせて踊った。大学に入り八尾を離れても必ずその時期だけは帰ってきた。

父は古い家の当主らしく堂々としてその枯れた音色を響かせた。

父は胡弓の名手だった。わたしの誇りだった。踊るよりは胡弓の弾き手になりたはずと思っていた。父はそんなわたしをどう見ていたのか、時々手ほどきをしてくれることもあった。我が家には何本も胡弓があったがなかでも紫檀で作られた年代を経て艶やかな音を出す胡弓が代々伝えられていた。

「家宝やぞ」と父は冗談めかして言っていた。わたしはその言葉通りに受け止めていた。わたしが触れることはなかったけれど、その音色はわたしの心に深く浸み込み離れることはなかった。一度も触らせてもらえなかったけれど家にはあの胡弓があると、わたしはいつも意識していた。我が家にはわたし以外に子供がいなかったから、わたしはいつかあの胡弓を手にするのだと信じていた。父の薦めでわたしはバイオリンを幼い頃から習っていた。県庁のある街の音楽教室に時間をかけて通い、長じてからは講師を頼んで習った。友達の間で唯一わたしは音大に進んだが「風の盆」には何があっても必ず帰ってきて父の音色に併せて踊ったものだ。

彼とは音大のキャンパスで出会った。

長身で明るい笑顔が印象的などから見ても「好青年」を絵に描いた人に見えて、彼があか抜けないわたしに声をかけてきたときには信じられなかった。

すぐに特別な関係には進まなかった。彼はサークルの一員でわたしはその新人生だった。彼は珍しく和楽器のコースを専攻していた。そのせいだろうかわたしが八尾の出身だという、すぐに「風の盆」のことを口にした。

「君も参加するのか。踊ったことがある？三味線や胡弓を弾いたことは？」

わたしは控えめにしかし誇りを込めてこう言った。

「わたしではないけれど、父が胡弓を弾きます」と。

その夏の終わり、サークルの仲間たち数名がわたしの田舎に行きたいと言いだし、彼も一緒にわたしの家に泊まることになった。

明日は「風の盆」という日、あいにくの雨になった。心配して空ばかり見上げる友達たちを気遣って父が胡弓を演奏してみせてくれた。あの家宝の紫檀の胡弓を。そのとき彼の目が輝いたのにわたし

は気づいた。他の友達たちが両手を広げたりも幅が広い我が家の金ピカの仏壇や、見上げるような大きさの中庭の石灯笼を感じして（呆れて？）見ているとき、彼だけが紫檀の胡弓をじっと見つめていた。

翌日、雨が上がりわたしは昔笠に着物を着て石畳の通りで踊った。友達たちはわたしに手を振り歓声を上げてくれたが彼だけは父の手元をじっと見ていた。

風の盆は三日間行われる。最近は知られるようになって観光客が多く訪れる。けれど深夜を過ぎて、特に最後の三日目は明け方までめいめいに楽しみながら演奏し踊る。わたしも明け方まで踊った。学校のみんなは疲れて帰ってしまった。けれどわたしは楽しめなかった。彼の視線が気になっていたからだ。

数年後父がガンに冒されていることが分かった。そのころ彼はわたしの恋人だった。彼の方からわたしに近づいてきたのだ。

苦しい闘病の末に父が亡くなったとき、彼は当然のようにわたしとともに葬儀に参列した。葬儀が終わった夜遅く、わたしは物音に目を覚ました。横に寝ていたはずの彼の姿がなかった。物音に導かれ

てわたしは奥の部屋にたどり着いた。そこでわたしはタンスや物置を探る彼の姿を見つけた。不審に思っただすわたしに、彼はまともな言葉を返すことができなかった。そして口にしたのだ。

「あの胡弓はどこにある」

明け方までまんじりともせずわたしは考えた。彼は何をしていたのか。そして気づいた。彼はあの胡弓を、父が大切にしていた紫檀の胡弓を探していたのだ。彼はわたしを好いていたのでなくあの胡弓を求めていたのだ。わたしは誰にも告げることなく父の遺品の胡弓を抱いて故郷を後にした。戻らなかつた。

それから後のことはよくおぼえていない。吹きつづける風を避けるようにわたしはさまよいこの町へやってきた。彼はわたしではなく父の大切な胡弓が欲しかつただけなのだ。そんなことは許されないと信じられない。その想いだけでわたしは逃げ出した。バイオリンはあれから弾いていない。胡弓もケースに入れたままだ。けれど単調で味気ない生活のなかでいつしかわたしは音色を、調べを欲していた。

仕事は何でも良かった、食べていけるなら。資格を持っているわけでもないし（楽器がすこし弾けるのは仕事にはぜんぜんつながらないのだと、こんな形で社に出ることになって嫌というほど知らされた）パートでコンビニに勤めだしたがすぐに辞めた。もらえる時給ではとても部屋を借りて生活できないし、店長のいやらしい目つきにも耐えられなかった。いつそバーで演奏でもと思ったが、そんな伝手もなかったし酔客を相手にするのにも苦痛だった。つまりわたしは二十代半ばにもなつて何ひとつできないのだった。

就職情報誌でみつけたのは自動車部品の製造工場。工場と言つてもかなり小さい方だ。事務をやるかといわれたがわたしにはそれすらできなかった。現場でおばさんたちに混じつて細かな部品の組立作業をする毎日だ。急ぎの仕事があるときは土日でも出勤になる。

「いいですよ。予定もないし」
そう返事をするわたしは都合良く使われている。それでいい。代休をもらいうして平日に人のいない公園に来ることができるのだから。

バイオリンにせよ胡弓にせよ、今いる会社の寮では弾けなかった。それでなくても隣の部屋の声や動きが筒抜けなのだ。両隣はどちらも中国からの研修生だったから、その話し声はわたしには言葉として認識できなかったけれど、わたしが楽器を部屋で弾くことはきつと許されないだろう。わたしはあちこちをさまよい歩いた。

その公園は平日の休み（平日に休みが取れるようにわざと土日に出勤しているが「若い人は休みにすることがあるでしょう」と周りの人にわざとらしくたずねられる。あの探るような目つきが嫌いだ）に行くときほとんど人影がない。わたしはすぐにそこが気に入った。

人の多いところは嫌だ。どこから見られている気がする。急に知り合いに出会ってしまうかもしれないという恐怖心があつて出かけるのを躊躇ってしまう。公園はそんな消去法で見つけた場所だった。市の中心部からはかなりはずれた、その分広い敷地に無用なとも思える施設（噴水や遊具や芝の広場）が点在している管理するおじさんおばさんのほうが利

用者より多いのではと思える時があるくらいだ。だからこそ肩の力を抜いてわたしは衣装ケースの奥から取り出した父の胡弓が弾ける。

胡弓を手にしたことのある人は少ないだろうからその大きさは想像しづらいだろうが、棹と同一部分をあわせると幅30センチ、高さ1メートルくらいで背の低いわたしがケースに入れて背負うとは頭の高さくらいになる。それに弓がある。そんな物を背負ってわたしは自転車ですさまよった。怪しげだっただろうと自分でも思う。だけどそうするしかなかった。中古の五千円で買った自転車は軋みながらわたしを見知らぬ土地へと連れて行ってくれる。そして見つけたのだ、誰もいない公園を。

丈の高い木の根本にペンキの剥げたベンチがあつた。冷たい風が吹いていた。春にはまだ早かった。わたしはコートの上をあわせて周囲を見回し父が大切にしていた胡弓を取り出した。目の前には芝生が広がっていた。サッカーボールなどを追いかける少年たちがいることがあるが今は誰もいない。春というには冷たすぎ

る風が黙って吹き抜けていくだけだ。

わたしは大きく息を吐いて弓を構える。今になって父の姿を思い描く。父がどうやって胡弓を弾いていたかを思い起こす。八尾の風景が浮かび父の音色が聞こえてくる。やがて思ったよりも柔らかな、けれど弱い音が流れ出しわたしは手を止めた。やはりだ。わたしには弾けない。この楽器はわたしの元にあつては駄目なのだ。そんな悲しい気持ちになりかけたとき、せわしない息づかいが聞こえてきた。目を開けるとクリーム色の毛並みの大柄な犬がわたしの目の前に来て親しげな顔つきでわたしを見つめていた。

弾き終わって目を開けると、目の前に大きな犬が座っていたのだ。まるでビクター犬のように小首を傾げわたしの演奏に聴き入っていたのだから。大きな声を出しそうになるのをやるところらえた。昔から犬は苦手だった。飼ってもらえなかったせいか慣れなくてぎこちなく接してしまふ。犬だけでなく人にもそうなのだけれど。大人の女性としてはいかがなものかと、ため息がでる。

公園の上に広がる澄んだ青空にわたし

のため息が消えていく。

困った顔で小さなため息をつくわたしを犬が見上げる。何という種類だろうか、きれいな毛並み。淡いクリーム色、短めの細かい毛がビッシリと生えている。今の生活で犬を見る機会は少ない。これまでに飼ったこともない。垂れた耳を傾けてわたしをじっと見ている。瞳に青い空に浮かんだ雲が映っているのさえわかる距離だった。

そばに細身の男性が困った顔をしてたずんでいった。犬に気を取られて気づくのが遅れた。きつと飼い主だ。野犬ではないことに少し安心した。男性は犬が来たがったので、とでも言いたげな顔つきだ。あの時人に見られていることを気にせず弾けたのはなぜだろう？ 人とのつき合いを絶つように暮らしてきたのに、見られていても抵抗を感じなかった。目の前にいるのが人ではなく物言わぬ犬だったからだろうか。

わたしは目を閉じて胡弓の調べのなかに入ってしまった。そこだけが変わりなく懐かしい、わたしと父とが暮らしていたあの頃を思い出せる場所だった。はじめ

に懐かしい「おわら」の調べを奏でた。次にいくつかの試みのパートからなるオリジナルの、と言っても専門家が聞けば

拙いものだろうが、わたしが作った胡弓のための曲を奏でた。ずっとわたしの耳の奥でその調べが鳴っていた。わたしは音楽なしでは生きていけないのだと、このごろようやく納得したところだ。それがプロの演奏家や作曲家という晴れやかな舞台ではなくとも、公園の片隅にもわたしの音楽はある。そしてこんな風に聴衆もいる。驚いたことに目の前の犬が私の音色にあわせるように遠吠えをしたら、とても楽しそうに、うれしそうに。曲を奏で終わると、犬の引き綱を持ったまま男性が控えめな拍手をしてくれた。思いやりのこもった小さな拍手。わたしが望める最高の賛辞。犬も座ったまま尻尾を振っている。枯れかけた芝生が尻尾でこすられてすこしだけ舞い散る。それが可笑しくてついわたしは笑った。笑ったのはいつ以来だろう？ 思い出せないほど久しぶりだ。

「すみません。こいつ、音に敏感すぎる場所があって、どうしてもそばで聞き

たいって言うので。遠吠えまでしちゃって」

「犬と話せるんですか？」

「あ、いえ、そうじゃなくて何となくナチの思っていることが伝わってくると言うか、わかるんです」

「息が合っているんですね」

「二人ですから」

犬も含めて二人という彼に何かしらの孤独を感じたけれど、孤独なのはわたしのほうだ。こんな会話をする相手さえ今のわたしにはいない。

なぜかもう一度弾くことを請われている気がした。不思議にそれは嫌ではなかった。わたしは犬の顔を見ながら胡弓を弾いた。途中で目を閉じた。いつになく曲に気持ちが入っていくのがわかった。懐かしい風景が心の中によみがえり、わたしは幼い頃に戻った気がした。途中からまた犬の伴奏も加わったが嫌ではなかった。冷たい風に身体が冷えていることに、目の前の珍しい観客のせいもあって気が付かなかった。北風は山脈をこえて乾いた冷たさをもたらした。わたしの身体は小刻みにふるえ指先はかじかみ、胡弓を押

さえている感触も定かではなかった。「めんなさい、身体が冷えてしまつて」わたしは目の前が暗くなるのを感じながらそれだけを告げベンチに横になった。木製のベンチから直に身体に冷たさが伝わってくる。心臓が止まりそうだ。かすれていく意識の中でそうなるならそれでもいいと思つた。

「ちよつと待つていてください。なにか暖かいものを探してきます。こいつを抱いていてください。犬のほうが体温が高いですから」

男性が犬をわたしに近づけてきた。わかつていても少しおびえる。けれどナチとよばれる犬はわたしに寄り添うように体をよせてきた。柔らかくて懐かしい温もりがわたしを包んだ。干し草のような、日だまりのような、そんなにおいだった。

男性がコーヒーの缶を買つてきてくれた。普段は飲まないが、今はその温もりと甘みが身体にしみるようだった。お礼にといわけてはなかつたけれど、わたしは息を整えてもう一度胡弓を持った。弾きたかつた。弾き終わると、男性は礼を言い犬は心残りな様子で振り返り、振

り返り去つていった。わたしは立ち上がり乾いた味気ない日常に戻つた。

あのあと、なぜだろうよくあの犬と男性を思い出す。何があつたわけでもないのに、浮かんできくる。気がつくともた会いたいと思うようになっていた。けれどそういう思いで公園を訪れても、なかなか会うことはできなかった。やがてわたしは休みの日には公園を訪れるようになった。そんな自分が不思議だった。なぜ男性に、犬に会いたいのかわからないまま、人が集う休日はまだ公園をたずねる自分が不憫だった。きつとそれだけ心が渴いているということなのだ。わたしは満たされない心を抱えながらたびたび公園にかよふのが習慣になつた。

*

私は凡庸な男だ。自覚がある。臆病で決断力がなくて、だからだろう一見して優しく見える。そんな男にすぎない。よくわかつている。冒険をしないで生きてきた。学業もそこそこだった。勤めた仕事も誰にでもできる作業だ。会社の規模

が大きいのからサラリーは悪くないが凡庸で夢のない仕事だ。仕方がない、そう思つて生きてきた。

ある日、上司が見合いの話を持つてきた。私は三十歳になつていた。浮いた話一つない生活だった。上司はそれを真面目と取つてくれたようだ。私は深く考えることなくお見合いの席へ赴いた。三十になつても独り者だった私を心配して上司が探してくれたのだろう。知り合いの娘さんだという。私より二つ下で三十が近くなつて親が心配しだした。

お見合いの席で彼女は二人きりになつたとき、それまでのおとなしそうな表情をまるで仮面のように器用にはずしてみせてそう言つた。快活な笑顔が印象的だった。世間知らずで内気だった私はその笑顔に魅せられた。

彼女は大学を卒業してずつと銀行に勤めてきた。仕事にやりがいを感じていたのだけれど上司が替わり、なぜか疎まれるようになった。

「身に覚えはないのだけど、女性どうしだから気に入らないところがあるのかも」そういつて笑つてみせた。お見合いか

ら二週間後のデートの時だった。彼女の希望で、車で県立の博物館に行った帰りだった。私は訪れるのは初めてだった。女性と隣り合わせることで自体がまるでずいぶん緊張していた。

「銀行やめちやおうかなっておもってたところにお見合いの話がきたから、ついふらふらと受けてしまつて」

まるで後悔しているようにそういう彼女の横顔を私は盗み見るようにのぞいたのだろう。私の不安そうな顔つきにとりなすように

「違ふの、お見合いしてよかつたとおもっています。まじめで優しい人だから」

確かにまじめで優しい。だがそれだけの男だ。彼女がどれだけ男性経験があつたのかは知らない。知ろうとも思わなかつた。出会つてからの彼女が私にとつてすべてだった。彼女が目の間にいてくれるだけで満足だった。

はじめは辞めると言つていた勤めも続けることで二人の結婚生活は始まつた。それから二年、子供をほしいとは口にせずしていた。彼女が仕事を続ける意志を示していたからでもあり、それは妻の苦手

な上司が転勤になつたからでもあつた。が、三十になり妻も考えるところがあつたのだろう。妊娠と退職の決意を同時に告げられて世間知らずだった私は驚いた。

それまでアパート暮らしだった私たちは妊娠を機会に新居の購入を検討した。「子供を育てるなら一戸建ての家がいい」

私に依存はなかつた。「犬を飼いたい」

子供の時からの夢なのだという。まるで出産と犬を飼うことがセットのように、だから出産の恐怖にも立ち向かえるのだとでもいうように、彼女は犬を飼うことを欲した。

彼女はどこで聞いてきたのか盲導犬協会に「キヤリア・チェンジ犬」の申し込みをした。そのためには書類での申し込みだけでなく、実際に盲導犬協会の施設を訪れて盲導犬の訓練を受けている犬たち、そして残念なことに盲導犬になれなかつた犬たちに会いに行く必要があつた。妻はともうれしそうに犬たちに会いに行った。そしてナチ、彼女の呼ぶところのナッチと出会つた。ナチはまるで妻のために生まれてきたような犬だった。

そして後に生まれてきた娘とも相性のいいやさしい犬だった。私はその他大勢と言えびがみに聞こえるが、一応飼い主と認められてはいたが、妻とはなつき方が異なつていた。

私も犬と暮らすのははじめてでそれほど動物好きでもない。態度には出さないようにしていた。が、私は大きなナチの体にその敏捷な動きに、鋭い牙にすこし怯えていた。それがナチにもわかつたら好きでもない人間がいきなり三十キロほどもある四つ足の動物に飛びかかられたら（それがフレンドリーな感情からだったとしても）怯えるのは無理ないとおもふのだが。

けれどやがてそんな犬との生活にも慣れ、私は愛妻とかわいい娘と忠実な、家庭犬として充分な訓練を受けた愛らしい飼い犬までそろつた幸せな生活を送ることになつた。

それが一年足らずで崩壊すると、誰か思つただろう。

きっかけは私の職場の移動だった。それまで事務系の仕事を行つていた私

ラインと呼ばれる全長二キロにもおよぶ組立の現場にたつと足がふるえだし、コンベアが動き出すと気持ちが悪くなった。代わってもらってトイレにかけこんだ。朝食べたものを吐きだし、それでも続く吐き気に苦しんだ。吐き気が収まり職場に戻ろうとするたび、しつこく吐き気は襲ってきた。その繰り返しで疲れ果て、私は昼前に早退して家に戻った。ナチが出迎えてくれた。柔らかな毛並みを撫ぜながら私はため息をついた。二度と立ち上がれそうにない疲れを感じていた。それ以来仕事には行っていない。気持ちが悪くなり、お腹も痛くなつて、職場にいられない。まるで学校に行けなくなつた小学生のようだと思つたがどうにもできなかつた。

心配した上司に言われ会社の産業医に診てもらい、紹介された心身クリニックにおもむき診察の結果「鬱病」と診断された。上司と相談した結果、半年間の休職と決まつた。三ヶ月後に我が家に上役が訪れ面談をして、復職のタイミングを計る。半年で無理なら一年あるいは二年間の休業も可能なのだそう。ありがた

いことに最低賃金は払ってもらえる。しばらくは何とか生きていけそうだった。

そうやってナチとの生活が始まつた。そのころの記憶はフィルタが掛かつたように曖昧だった。私は誰に会い何を言ったのか、何を考えていたのか、思い出さうとしても何一つ思い出せないままだった。覚えているのは暖かで柔らかなナチの手触りだけだった。

そして私はナチに請われていった公園であの人に会つた。初めて見る楽器を抱いて丈の高い木の下でそれまで聞いたこともない音色の曲を弾いていた。ナチは遠くから彼女の、いや彼女の奏でる音色に魅かれて吸い寄せられるように近寄つていった。曲が終りぎごちなく挨拶を交わし、そのうち寒さのせいだろうか彼女の顔色が悪くなりベンチに横になつた。

ナチに傍にいてもらつて私は自販機に暖かい飲み物を買いに走つた。それが良かったのか、彼女の顔色は良くなりもう一曲弾いてくれた。その間ナチは魅入られたように座つて聞いていた。まるでなくしたものをやつと見つけたとでもいうように。

北風が吹くたび、あの時のことを思い出す。自分でも不思議だったのだが、音感が悪い私が、あの女性が奏でてくれた哀愁を帯びた旋律を不意に鮮やかに思い出す。それも思いがけない場所やタイミングでよみがえり、しばらくの間その旋律で頭の中が一杯になる。

本当に俺は壊れてしまつたのかもしれない。私はそう思うようになった。同時にもう一度あの胡弓という見慣れない楽器の音色を聞きたいと願うようになった。だからナチとの散歩はそれからずっとあの公園だった。ナチは最初、不思議そうな顔をしたけれど、やがて何かを悟つたかのようにみずから公園に向かうようになった。私たちは朝夕続けて公園ばかりを歩いた。

ナチは私の気持ちが読めるように芝生の植わつた広場へと赴く。あの女性が座つていたベンチの前に導きあたりを見回し、がっかりしたように首を落とすナチはともいじらしかった。それまで以上にナチへの愛情が心の中に芽生えてきた。私は満たされたい気持ちを抱えて公園をさまよううつろな目つきをした男だった。

願いは叶うと信じて公園へと赴くしかなかった。公園につくとナチはうれしそうに駆けだし、広場に彼女がいらないことを見極めると、まるで自分の責任でもあるかのようにしおたれ長い尻尾を後ろ足に巻き込んでノロノロと歩く。そんなことが続いた。共有する夢にすぎないように、私とナチは今日こそは公園へ向かった。そしてある日私とナチはあの人に出会った。狂ったようにナチは駆けだし、躓きそうになりながら私は後を追った。夢の中を進むような気持ちだった。息を切らしてやってきた私とナチに驚きながら、あの人には笑みを浮かべた。その手にはあの楽器があった。

さあ、と言わんばかりにナチは目の前に座り込み期待に満ちた表情で見上げている。私は一度しか会っていないのに、あの人ですこし痩せたのではないかと感じた。

「お久しぶりです」

緊張して声がかすれた。その声は吹いてきた風に運ばれていきそうだった。彼女はうなずきナチに手を振る。ナチの尻尾がはげしく振られ彼女がほほえみ、そ

のあと一瞬敵しい顔つきになり弓を持ち直す。そして私が想い続けたあの調べを奏でてくれた。

その調べは細くやわらかく躊躇うように、澄んだ淡い青空に響きやがて消えていく。

贅沢な時間だった。私たちの周囲だけが切り取られて特別な空間に入り込んだような不思議な感覚だった。調べは私の心を揺さぶり、掻き立て、打ちのめし、見知らぬ遠い場所へと連れて行く。そこははじめてなのに懐かしい場所だった。

気がつくくと調べは消え私はうなだれて声を殺して泣いていた。それに気付いたのだろう、ナチが心配そうに見上げていた。それが解っているのに、私はいま身体のかなを通り過ぎてゆく切実で取り替えがきかない大切な感情に支配されて身動きもできず、膝を折って涙を流し続けているのだった。

「すみません。あの、なにか失礼なことをしてしまったか？」

涙に気付いて彼女は動揺し、誤解し、困惑していた。その様を見てようやく金縛りが解けた。彼女の誤解を解きたくて

ナチの尻尾のように手を強く振った。そうではないのだ。あなたのせいではないのだと伝えたくて。

「すみません。いろいろあって」

彼女は困った顔をし、横に置いてあったバックからハンカチを取り出して手渡してくれた。そのハンカチで涙をふいて良いものか躊躇っているナチがしやがみ込んだ私の膝に這い上がるように前足をかけてきて、舌で顔をなめだした。

「うわあ！」

たまらず私はのけぞり、ナチとともに仰向けにひっくり返った。庇うように手をついたのだが、渡されたばかりのハンカチは芝に押しつけられて汚れてしまった。それを見て、私は哀れな声をあげた。彼女は涙とナチのよだれにまみれひっつきかえり哀しげな顔をした男にどんな顔をしたらよいのか困惑した様子だった。けれどその表情のすぐ下には、面白がっている感情が隠されていた。そしてすぐに仮面は剥がされ、彼女は笑い出した。目尻に涙を浮かべるほど。

「ごめんさい」

謝りながらも彼女の笑いはなかなか収

まらなかつた。

「ああ、こんなに笑つたのつて久しぶり。思いつきり笑つてすつきりした気分」

そういつて空を見上げる。つられて私とナチも澄んだ空をしばらく見上げた。

「何という曲ですか？　じつはこの前聞いてからなぜか耳から離れなくなつてしまつて。といつてちゃんと覚えてはいるわけでもないで、何と言つていいか、じつに気持ちの悪いことになつていて」

私は正直に打ち明けた。けれど伝わりにくいだろうなども懸念した。案の定、彼女は困つたような顔をして手元の小振りな楽器を見つめ、私の顔をまるで本心で言つていますかとも言いたげな探る目で見つめた。ナチだけがもう一度聞かせてくださいと言いたげにすり寄つていき、胡弓に鼻面を押しつける。

「こら、ナチ、やめろ」

「ナチつていうんですか、大きいですぬ」「ラブラドルの牡としては平均的な大きさでしょうか」

「そうなんですか。私、詳しくないので、そういうながら頭を撫でるけれど、本人が言つているように慣れていなさそう

な恐々した手つきだつた。それなのにナチはぐいぐいと女性の方に迫つていく。

私はもう一度リードを強く曳いてナチを引き戻した。従順なナチにしては珍しいことだつた。

「よかつたらあの曲をもう一度聞かせてほしいのですが」

名前も知らない女性は困つたような顔つきになつた。何か悪いことを言つただろうかと私は心配になつた。見上げるとベンチの傍らの木に白い大ぶりの花がいくつも咲いているのが見えた。

*

わたしは駆け寄つてくる犬と男性を見た。ホツとすると同時に、何故か身構えてしまつた。笑顔を作ろうとするがこわばつて

いるのが自分でもわかつた。逢いたいと思つていた犬とその飼い主なのに。けれど柔和な犬の顔を見ているうちにこわばつた気持ちはひなたに置かれた氷が解けるように消えていつた。

「お久しぶりです」

優しい声だつた。それ以上に犬の表情

が、仕草がわたしを打ち解けさせた。そして驚いたことに前回弾いた曲（とも言えぬ断片をつなぎ合わせた私のオリジナル）を聞きたいという。しらべが耳に残つているのだとも。私は空を見上げた。すんだ薄い青の空がひろがっている。私は深呼吸をして気持ちを整え、頭のなかに音が響いてくるのを待つた。幼いころ父に言われたやり方だつた。

うまく弾けたかどうかわからない。目を閉じて弾いていたのだから、目を開けると男性が涙を流していた。犬は嬉しそうにわたしを見つめて尻尾を大きく振っている。わたしは大人の男性が人目もはばからず泣いている姿を見るのが忍びなくてハンカチを取り出して渡すとナチが男性の顔をなめようとしてのしかかり、もろとも倒れてしまつた。私ははじめ我慢していたけれどこらえきれなくなつて笑つてしまつた。ごまかすように上を向く。ベンチは大きな木が何本も植わつたすぐそばにあつた。そして見つけた。それまで何の木だとは意識もしてこなかつた木の梢に沢山の白い花が咲きかけているのを。

「わあ、気がつかなかった。咲いていますね。これ、辛夷、いや木蓮ですよね」

わたしの声に涙の筋を付けたまま男性がわたしの視線に合わせるように上を向いた。

「そうですね。家内が好きだったんです。この季節だった。すっかり忘れてしまっていた。ああ木蓮だ。木蓮の花が咲いている」

男性は木を見上げながらまた泣いているようだった。亡くなった妻がとか、以前聞いた孤独で犬と二人だけだとか、詳しいことはわからないけれど何となく想像はついた。男性は袖口で涙の跡をふくとう言ったのだ。

「ありがとうございます。やつと気づくことができました。あなたの奏でる音楽を聴いているうちに、何とかか憑き物が落ちたみたいに楽に、というとか変ですが気持ち少しだけ軽くなった気がします。私一人が立ち止まっただけでも季節は流れていくのだと。出来るかどうかわかりませんが、もう一度やり直してみます。私にはナチもいますし。妻と子供に償いをしながら生きて行きます。そのこ

とにあなたとあなたの楽器が気づかせてくれました。ありがとうございます。汚してしまつたハンカチは今度会うときにかえます」

そう言いおえるのとあつげにとられているわたしを残して男性は犬と一緒に歩いて行つてしまつた。途中なにか振りかえり笑顔で手を振りながら。

わたしは胡弓をケースに仕舞い、もう一度木蓮を見上げた。久しぶりに笑つたからだろうかスツキリした気分だった。

あの男性がどんな苦しみを抱えていようが、わたしがどんな憎しみに振り回されていようが、木蓮には関係ないことだった。ただ生き物の営みとして花を咲かせようとしている。それだけだ。そのことが胸にスツと入つてきた。

わたしは八尾に帰ろうと思つた。あの男性がいつた「償い」という言葉が胸に残っていた。わたしも償おうと思つた。そのために田舎に帰り頭を下げ父の墓前に参るのだ。そして九月一日の風の盆には父の代わりに胡弓を弾いて町を流せたなら、そう思つた。決して簡単ではないだろうけれど、わたしはきつとそうする

と知つていた。そのことに半ば驚き、半ば嬉しくなつた。

見上げると白い木蓮の花がいくつも開きかけている。わたしは木蓮が胡弓を、わたしの奏でる音を聴いてくれていたのだと思つた。父もどこかで聞いていたくれたらどうか？

小さくなつていく犬と男性をわたしは見ている。

了